帝国図書館蔵

へ利9
1285
2

緒言

芍藥亭大人の文章一家れ新古にして本店持の蹈襲無し文辭取立の手代よりくたてつらもし構思染出せし暖簾の如く

明治二十年 日本橋区 蔵書

いと新し學の門口ひろう
さきとも胸は奥行てう
かてうとしたん

天保甲辰春　藤原長樹

芍藥亭文集二篇目録

○記

三樂亭記　甲子樓記

○辞

夜娼辞　雪辞
勸和歌辞　賞蕓氏刀辞
贈檜昇園辞　贈文月堂辞
贈台星子辞　贈玉兎園辞
槙廼屋判者披露辞　苍誘園三余亭判者披露辞
旭日菴栲廼屋判者披露辞　悼春友亭辞
芦菴小祥忌狂歌勸進辞　文々舍小祥忌狂歌勸進辞

○文
贈桑樹文
贈琴廼屋文
卧龍園小祥忌文
○序
戀百首序
詞花集序
双調集序
紅絲集序
人物誌序
衣手集序
加能越三國百人一首序 同二篇序
新関東百題集序
書画帖序
水面集序
戲場百首序
紀州狂歌集序
春家土産序
水魚集序

○賛
和漢尚齒會賛
福祿壽賛
喜撰法師賛
大原女賛
王昭君賛
猿曳賛
淺妻舟賛
達磨遊女賛
深川娼妓賛
小鍛冶賛
李白賛
龜賛
鯖鮠賛
竹虎賛
昇瀧鯉賛
孤廻燈籠賛
○箴
河豚箴

○銘
黒茶碗銘
座右銘
○評
仮名手本忠臣蔵評
○論
刀劔論

茶七銘

芍藥亭文集二篇

芍藥亭菅原長根

三樂亭記

三唐の詩集を書架ふ積ミ二王の法帖を机の上ニ並ク聯ハ日本刀の歌を写シ窓ハ印章の方圓ふ開ク掛画の一文字ふ菜乃白ひ洛ク床板の柾目細ふ杢美シ花瓶ハ枝ふ真草をキとシ碁盤ハ石ふ平ス紙ふつ苔焼竜ふ蒸て古仏ニつだシく雨樹葉を洗て清新めぐたシ梅干ふを含ミ橘茶を裝ぬ捨植の砌ふ大和瞿麥を蒔キ切戸ハ花ふ筑ふ牡丹を栽筆を拭ゝ〆ハ紙ふ不思紙ふ〆ゝ〆ゝされハ柿の葉紅なるべシ老僕詩を煉て歩むを遠くふ童草を学て走る事ニ年シ

島田髷の仕婦笄長短を論じ、長紙髷の侍女簪巧拙を競ふ此家の主ハ誰と書少く詩を巧ふして刀劍を愛も此三つを以て亭主二楽と号く五色の筆を奪れむとして三尺の劍を聚む姓ハ藤原名ハ長樹と号え〳〵風流士よ〳〵あとらる古人女の劍を舞ものを見て草書の妙ハ得るべし今君自刀を弄ぶ筆陳歌ふしとい

べし

甲子樓記　家号大黒屋在花街江戸町

福禄壽鹿を伴ひて一夜の妻を戀ひ毘沙門金を擲て百両の富小誇る壽老ハ閨の裏ハ鶴を折る雛妓を愛し布袋の座敷ハ子宝乃髪を聚む妓ハ皆額ふる井のふき弁天客ハもとゞく懐ハ黄白なる福神家の白鼠生業を助け鰕で鯛を釣る幸絶る事ふし

色の湊ハ紙ふ中ハ世の實舟こに多く寄り来るハ嗟嘆ハ大黒と

ちるして主人えひをハ耳たぶよき故ふるべし

夜娼辞

妾ハ鷹の精身を六文の波錢ハ沈む郎ハ雀の質命を一ハ法

竹光ハ懸るあぶし桟木の花ハ侍るふしも慎て鼻柱を折く

ゆ為ふれ

雪辞

柳の如糸風ハ孔雀て一葉の舟南に走り鳥の毛空ハ飜て翅駕

籠北ハ飛ふ真の足くやもとれる情の忘れぐさも〻のをうふるべ

勧和歌辞

神の代の歌ハ卵の如く萬葉の歌ハ雛の如し古今ハ羽異とのひるる

和哥浦鶴ひとそび羽うてバ大そらのさそらいさらぬ限ふし
項赤き鄙の翁も脛長き賤ゝ女も此道ふ心とぐむるものハ名を
雲井の高きふ岑え峯ハ千載の後ふ伝ふべし

賞兼氏所造刀辞　生島氏佩刀

平盛正めしゝ社取伝ふられしゝ美濃の国兼氏ゞ造まし太刀も
その家も関の荒川不絶して万代ゆるも君ふ仕ふる身の護ふ
とおぼしゝふるべし

たのゝしあるふゆ鞘ふをさまりし代ゆるもつきれぬ丸刃の太刀

贈高砂園辞　上野国藤岡人

高き砂ハ南の山ふ肖て寿長く老しゝ松ハ住の江とゝもに緑ふうし
るゝの浦ゝ洲濱ふ木ふりよく立ハりきう為壱の松

贈檜昇園辞　上野国人　檜園社中

檜昇園の主ハ檜園良栽多き中ふ殊ゝ秀しゝとて水魚のをきた
ちこれを檜翁壱の判者ふ加ふ枝りつゝ檜ハ壱盤雄の号ゝ社
胸の毛よりふりぬきバ上つ毛の国の人ハふをきハしたゝ再び名を
ふて此乃ふ一の家を建られんるゆゑ社あらふるべし

贈文月堂辞　名照芳

獨学ぶハ道ふ進ゆおそしゝあらそふ友ゆれバあゆゆゆを知る事
を毋しゝとて葛餅の判者よくゝられしゝ文月堂ハ心ある
こゆゑ人ふしてけふより後文の苑彩ふ色をそ心乃月いよゝ
明るべし

贈台星子辞　名須彌丸

日光ハ此星出ヽ日星を生と以ひきんもてことわるもと刊珠を編て山茂の光をそへ心珠を懸て名を雲井ハうゑ母さんとの拔ヽと台星のかゝちを詳ハ說まゝわる鳳鳴閣主公の眼ハ学の窓ハみゞれあけハ〳〵世道の望遠鐘とこそいふべきれ

贈王兎園辞　名須美丸　京都人亜号青洋

月の新人玉兎園のぬし〳〵やびなさ〳〵わさ〳〵千里の外迄も写え〳〵をいうでうそ〳〵耳ハ学流をゞきとて〻ゑ魚ハ交ゆき人〳〵おゝて判者ハ勸られ〳〵ハであり学ふ。ふとう後葉を搗く景を慕ひ桂斧代る斧をとふ者いよ〳〵多るゑ〳〵

槙廼屋狂歌判者披露辞　名音高

香あれどもきゝとふ風あけきバ幸〳〵葉〳〵音のれども動るもものなきれバ高く不響されで花の名音写主を世ハ鳴せんとて新者ハ加ふる凡印のそゞ名よ。梅ハ葉風とふ歌をとう重ねるものハ。梅ハ香を夜半ハ嵐ハと。嘉言がよみハ〳〵ハ歌をひとう〳〵に〻ものあるきれ

花誘園三余亭判者披露辞　苍誘園名長文　三余亭名投道

ふふ歌ハ歌為の支道あるを詞の花咲ある風ハ誘れて意馬を優あるゑハの〳〵進れバ和歌の本街道ハ出ていハ〳〵人の凡徘〳〵きんぼう〳〵ハあゝうを撰りえさ〳〵んと拔ゝ口をゝきれざるを此二人のみゆびをハとハ境をわきまへて花ハ迷迷わきど枝ハ長短ハけきでゝ〳〵ハ此道の案内者ハ加ふるとゝ市中梅の詠艸ハ凡印きそ

めさせけりぬ。賢き人の市ふ隠るとぞうらうらあづ〳〵隠れ多る名を世ふ知〳〵せまほしとあるふさふん

旭日菴拷廼屋判者披露辞　旭日菴名千貞拷廼屋名音好　武隈庵双樹社中

武隈の庭ふ旭の紅。拷の白き双樹の梅ありこれを極ふ〳〵ふ。楚辞ふ為ふ〳〵〳〵ようう〳〵み源〳〵此春日あうりよ紀文の場ふ〳〵ふ〳〵裁て詞の花ふ咲ともてもあさせまほ〳〵とうくおのれ花ふされ〳〵ハ刃ふ〳〵龍の時をえ〳〵と社ふふ〳〵きん

惇春文亭辞　名政明檜園男　勧進歌題落葉

根ふ〳〵りし若木の花をいさみ〳〵枝ふ〳〵ぬ落葉の歌を集る檜園ぬ〳〵ハ男たち〳〵ひあ世まぬ〳〵ぬ〳〵きをぐ〳〵とたの名るものこるをうしふたん〳〵め社君乃ふげきこ〳〵ま。

むさ名ふ為れて子ハまさりけりと。涙泉ふ〳〵式部ふも物まきりぬ〳〵ふ〳〵ふ為添ふをいさ為ふやむせぶらん

芦菴一馬小祥忌狂歌勧進辞

一日千里と空え〳〵芦菴ぬ〳〵今年春のそ〳〵め髪乱ふ為ふ堀のあるで駒のとくもぐ〳〵ひと名ぐりふいと為ふ〳〵近よりぬ名馬の骨を埋とわ為ひ為ふ人〳〵ハ為ふき價のこが祢乃ふとぐを為ふ為ん年を祢ふふ為ん

文々舎鱟子丸小祥忌狂歌勧進辞

元為ふ為ふを扇ふ為ふ為ハ鱟同ぐ〳〵世ふとて為ふ為れて虎と為ふ物ありし鱟ふ丸の翁。為ぎる湯の泡と消ふれ〳〵も大ふ〳〵紙

横ふ日くの日のあ〜ちや〜吉野が盆一閑とあり。翁家ゆゝ
このあれど黄金の聲ある多向の歌。鶏の羽ふく濱家ふ寄り来
〜如くきゝつゝたちそせんすを孫のふまるん

贈桑樹園文　名玉世　上州藤岡人

桑を栽ざれハ蠶をゆ〜あひぐゝ。蠶を中〜ふハさんハ。家富ぐゝ〜。
蠶繭をほ〜ゝ〜ゝ。糸を繰り。綿とふ〜。紬を織る。皆桑の功〜
家ふ貨を積て衣を就衣食ふ飽き居を安くやゝ皆蠶の力〜
されハ桑ハ揺籃樹ふ〜て。蠶ハ如意珠と。世ふ〜ゝ。桑をとて
園ふ栽ゆ。玉をとて自祢ぢ。家の風おぢやゝあれハ。園ふひゝく
金ぢ。数る事毎〜みゆ〜ん。源ぢれハ詠出る玉乃言絶る事
あ〜のる〜

贈琴廷屋文　尾州名護屋人

掛垂の松ふハ天人座の謎〜ある〜〜。俵戸の鶴ハ大磯通のおも
〜のけあ〜ん。ゆ地窓ハ鞠形のまぐ〜ふ似ぐれど。手水鉢ハ龍頭の
名むゆ〜〜〜。額の船板ハいゝ〜〜を志のぶ〜をやまちめ〜ん。
庭の松葉ハ禅を学ぶ密をやとてあまと〜〜ん。心高き山まゆり。
歌乃凋紙〜〜む。心添〜〜水よあり。言のあや濯〜ぐ。書を
知る友。齢皆永きれハいつの絃をれん。書を通ま人交いと
ひろきれハ〜のぞ〜。柱ふ膠ぢん。これを愛〜て義ぢ深ち〜
ぢ〜〜ゆ〜心ある女ふあふ〜も寡を挑るふ〜れ。これを拝て
五〜〜〜ぢ柳の蔭ふ寄ふ記酒を酌むとも鶴を烹るゆふれ

臥龍園小祥忌文

四方の歌垣傾て。朝顔の盛をまちあこ。六樹の園葉落て。残きくの
屋花の紅露けのみし後ハわきて世翁を。教授紫ふるゝ
大江戸の花とゝてまやゝに。女郎花栗原炊ぐ爰さめし
よりゝ又世年ゆきりもとをもぐて。去年の十二月十日分中ゝ
れしハ葛のづら長き恨よあんぐれど彼ホハ萩ぶ花書。
蓮の臺をなてよゝつゝ。此所ホハうるハし。紅梅ホ法の道を
おゝけゝくまゑ中のみまつゝ。祇めれぬ。二世とゝホ安ゝに
樂とゆべゝ。ちゝ一周ホ秋乃草花の歌をとりゝ祢て。
手向くゝホふきゝやとあゝとひおゝされゝて我ゝ涼しき
花よいまゝと翁の心いよゝ涼しくおゝもゝ免

芳園ふおもゝけうつをあきたまゝ年ゝ七十七くさの序

詞花集序

新古今ハ苔まだ彩勅撰ハ實まをゝりとば。橋の實さく花やゝく
めでゝ紅ハいゝくまれあゝ。山吹や花ありて実ゝ無花
菓ハ実ゝりて芳ゝ。山吹やまゝ紅いゝちゝくやゝふゝゝき

戀百首序

古今集千百首の中ホ戀の歌三百六十首を載て男女の心ゝをそすを
のゝ戀と定めゝれゝ世ホハ戀を歌の本義の根ホあゝ
ひあゆまゝりて。ひゝぶるホ情の係ゝふんすをゝゝあ。ひゝくさの
歌の故ホ。千とせ先後まで。も名をゝぶゝぬゝ。ふゝ栄の加賀乃
たゝひ。又ゝ海ふゝの紅ホまぎて。ゆホ志のびゝる歌もをくふゝゝ
まで。荷田氏の絶ゝく戀の歌よあさりしゝ。ゝる示あれ。でゝ。

まてこれまてはあそれ歌ハ趣のめつらゝを奥あんすをむ
祢ゝつれべ古今夷曲後撰夷曲集ハさゝふゝいそぎ雄長老
負徳あぞ堀河百首をそぢめ明和よりこれのゝ世乃大江戸
行れてきぐれ人秀〻歌さハふれど難ふさ戀の歌ハいとま
紙ゝりされバ此後集撰ん人の為ふもと此百そをおとひ立ぬ
るふこ抜ゝりきれ来得ぞ逸ふふゝん米人ぶ力れゝどハなぞ
よゝいひおゝせぬれど人の笑んあゝふくいひ出ゝくゝもの歌
癒ん人ゝあそれ藥のむもゝしゝあどゝあゝる戀乃歌ゝをおゝえ
ぬもおゝこゝり狂意の歌ゝあけつゝふゞきゝゆなまゝあれゞし
ゝゝふゝ筆をさゝおきぬ

紅絲集序

紅の絲ハいふあはゞるゝものふやあ里ん此絲ひゝゝびゝゝれぬまゞ
とゝもふ天を不戴讐ふゝ朝の雲とあひき遠〻ゝを隔〻ゝとゝ
暮の雨ふゝゝゝちぬゝこゝ抜〻あ年きれ志ゝ抜えてとゝふ歯生
ひ雑を射てゝ〻免て顔やゝゝゝゝゝゝゝゝ馬ゝ乗て〻えびゝゝの
國ふ入りゝゝゝゝ亀ふいゞふハれて〻龍の都ふ通ひてしれゞびふき
ゝ〻ゝゝゝおゝひゝけぬえふ〻ゝゝゝと多ゝれバ〻からの〻やゝふゝゝ
貴き賤き人〻をあゝゝん奥あゝ〻〻とゝゝきふ抜びの名伐
ゝゝゝゝあふ出雲の神毎月ゝゝゝめ瓜ゝゝゝゝ判の詞をゝ
抜ゝふゝ

雙調集序　六条園撰

保亂ゝの世ふ名高ゝゝし人の文を論〻〻匡衡ハ命を伐〻まぬ

えみ〳〵ぬの隊を乱し、先をあらそふて鋒あらりがゝ新名ハ雪はあしゝうるはしき高殿ふ筑紫琴う紀あゝをぶ如しといて大江戸の狂歌、古き調の秀しハ、匡衡ふ似て今の調のまゝ〳〵しハ新名ふ似ゝりされと奥保〳〵んとそ〳〵俗まぎしハ落書ふちゝく心高〳〵んとそ〳〵雅まぎしハ和歌ふまぎひてとゝふゆ〳〵しく六条園の主ハ此二の調のよろ〳〵しく紀を撰て、名づけられしも、うれゝしく〳〵ぬ君子の心とゝ和ゝふ〳〵きれ

衣手集序　芍菴一馬撰　以轡爲記歸

字を学ぶより書籍覧ハるゝく歌を詠より歌を撰ハる紀を以四のわざにまぎれしゝ轡連のをさ芍菴の主ハ千里の駿足ふでありきる。天保九年の春ひふ歌の乃志るゝふとそ雪ふ凡志るゝそ、ゝ山

定めたる摺物を衣手集と号られしハ常陸の國人あれゝ名ぶ

人物志序

こゝ毎び名ハ四方の瀧水遠く響ふゝ〳〵その人ハいゝこの男山とも知られざゝんハぶちをゝきわさふありとそ、武隈菴のぬし。此ふゝをつくり出しゝ、七つ梅香くハしき名を、後の世ふ結んハまの一つゝり、一杯の酒ふ志るゝといふ人ふハ、ゝんもちゝきゝとの歌

新関東百題集序　檜園撰

詞ハ古錢の古きを用ゝ心ハ新ゝきの新きを用ゝとハ和歌の教ふきと五銖駒牽の雅俗ふ不拘紅毛仙臺の異躰を不弃ハれとれ歌の通用ひろき所錢ゝよりゝゝでやハあるゝきとて、此ひと奏も髭の枚を詩百九十六と定ゝやゝで、関東百影集と号るふてありける

加能越三國百人一首序

賀をかふる豊なる代にあひて、ふるき道ゝをまもれるうけぬまど詞の花咲きハ能登れるをかざり集られしハ越の中にふりくたなやまを紀りぞふにハおふじし此ふるに載まししハ三国にて秀ふみびゝとあれバ富士の鶴芝千とせの後までも名ハ朽せざるべしこまさを選し人ハ誰そ北の国にありて東の都にもきこえやまうふぬ西南宮とて四方に名乃ゆかしく翁にてありける

同二編序

めぐれる山のたけ高き石をもまろだきをらし其仲さぶたるよさるうふれつき岩にせのるておとしろき調そふつふさる八ちし百川の水、ふたゝび詞の海に入るをみると悦たのしきれ

水面集序　撰者 採撰亭 水静園 芍薬亭

山吹ハ金の波をよせ、紅葉移れバ紅の錦を浣ふされどその所を過ぎバただの色にかへりて白糸の染まるならびにハあらぬ水よこそながらくのふかしふハまのせながら深くあづまるで世ところふうつりかはるならひ歌の似つれバとて安久楽、亀佳二人の主水よゆかりあるに六くさの歌をとり重て、其のてこのとぢふしを水の面と名づけられぬ、水ハ三角のさのあつまれるにとゆつまきバ三人の机をむしをとりてよしあしを定られしも故あるき事にハあらじかし

書画帖序

轄を井に投て車座に並び妓に酌をとらせて肉陳を布しとも、

いつまでも客をとどむべき常ふ名ある人とさしむひて客去るてふ〳〵主倦てふあるさハ書画帖ふまされるハあらじ

狂歌集序

應紀孔人需

紀の玉ゐち千尋の海乃底ゐとゝ玉の半潛とゝいふふるあくりふハ不似よゝみ歌珊瑚の林珠をつゝ綿とぞぶゝ龍の宮殿うるハしく よそゐひゐしてあやまることぞ醜きのゝされバ犀を燃てゐる人ありとも愧るまいとあの彩ゞ

戯場百首序

執事の区取交ひゐゝゐれ春狂言のよゑめ不盛景品の積物山高ゝゐされバ顔見世の判者不貴甲乙の番附丈長ゐのらされバ切落の文面ゝ搦巻の画本彩色を加ゐれバよゝみ歌の人不多白地ゐ故ゐを引時代ゝのゝ拵きゐり好て

俗語を用ハ世話事の陋あり所作ゝやびをむ祢ともる女形ハ和歌ゐ流まゝせりふをゝゝゐ紙をゐゝむる道外ハ落書ゐ墮つ無言引返ゝゐ幕の余情を含ゝ和實掃舞臺乃幽玄を究む色子ゐ馴染ゐゝ敵役も座敷あり贔屓の多少ハ藝の優劣ゐ不拘實惡の風調人の好悪ゐよるゞゝ近ごろれてゝもの多ゝく世を去れども今猶作者もゝ色とせゞ江戸の見功者眼あれども遠境の評判記耳をたゐとゐをいゐ也

水魚集序

兼題月

堀ぬきの井水をえゝゝゐゝ地曳の網魚のをどるゞ如き此樓の縁ひゐ何を若ゐ汲るあゝれより塩魚配るゲまて白く水の昼夜をまて沈いゐ魚の鮮ゐ月とゞむるゝゝび人等ゐ水魚の新店をゑゐ九月の歌を仕へまゝて貴初の系ゐを出まゐゞあゝけるおとゐふゐ此人〳〵とゐ

学ぶ人は海川の海原あるとも。詠歌よハ。文看乃おちゝらふる
丁〻。震流のあつまる所。一網のえやまきとのあゝんや。岩根さそ
ふ水よ花〻のうされて。交のよろこひよ不堪。三盃のみをかあ平
ひとゝ所のむふ歌をうゝふ。

中のとき鏡ともあれ打那てあさる魚と水乃上の月

春家 土産序 至清堂撰 遊野州

ことゝひと巻ハ至清堂のぬし。春の旅窠ふ若艸の法師ちふ人有
て。芝生のつゞふぬきとゝれ。こゝのちぐさふ。うゝハ〻めづら
うふる除井の春乃庭牛島の秋の園ふもえやまとゝ。これで呼莫と
をはゝで咲生〻たゝもつけの花とやいとます〻

和漢尚歯會賛 武州浦島三浦 西王母東方朔彭祖

三浦ハ浦島が七世の孫ふハあらむ。彭祖ハ武内が数代の祖とやいふ。漢と。和の寄合世帯。東方朔文を作て自衒の引札を配り。西王母。店を張て客をひく。嬌態をふし。長生殿の裏町ふ長生の藥を賣バ。不老門前買ふ人市をなすべし

福禄壽賛

徳を脩れハ。手を拳て招ぎれども。福ゝの家ふ聚り。戈をやしあく。耳たぶよりふびして。禄その中ふあり。色よ溺ざれバ壽つぶり。ゆゝともふ長し

喜撰法師賛

炭の衣ゐいろのつふり。身を宇治ふ隠して名ハ後昔ふ伝ふ詞乃花香煎ゝ茶とゝふ高し

大原女賛

牽牛機を織る。西陳が町織女牛を牽く大原の郷

入婚を家ふ残ゝて出あるゝふひ黒木をゝりにあゝまおきるゝ

王昭君賛　抱渾不似

昭君。えびきの國ふて琵琶をつくしふ。きゝで似ざりしよう。渾不似と号ゝ

四つのをなもあゝぞあもおもびの きゝ ゆざりしう津ゝ ゐゝ

猿曳賛

一升の米ハ龍宮の俵とれども不尽。拾匹の銭ハ仙家の貨つゝども復来

養ひて成人寒やゝ ゝ つのゝらんたゝひとつふる猿のうたてきぬ

朝妻舟賛　摸英一蝶畫

顔の色ハ牡丹の英より羅しく、舞の袖ハ胡蝶の翅より輕し、朝妻の雲、られ舟の雨、心ある風のあつらへ、ふるさとあさゐの水臭きたきあるもふびく、糸柳いづくふる身をつるぎたつらん

達磨遊女首曳賛

一人ハ諸佛出世の門を開て、教外別傳の手管を尽し、一人ハ九年面壁の眼を閉て、不立文字の魂膽を碎く、遅ぶれバ悟ぶ、聖の老禪、北郭の壮妓、勝敗いまぞ知るべし

深川娼婦賛

八幡のゝ祢ごとも、中の衣隔まバかたりやもく、三絃のまのびごとも、緑の糸きられバつふぎぐ、抱て思ひの淵よ沈む石場、そぐろに眠くるふくのれ墮て秋の波ふ溺るゝ土橋、こだりて

渡ることあるまじ彰の表櫓を愛る人多きれど服の仲町を知る客きれたり

小鍛冶賛　狐把槌立

貍風を發し、狐槌を把る、其業神ハ通といふべし

季の世ふ人をやとしハ刀剣冶ありとそ祢てもしへるを

李太白観瀧圖賛

顔ハ桃李園の花より紅たり瀧ハ太白煉の餡より白し

酒の醉さ多ぬ、ハ百藥の出者ふたしん死こ和こもめ

龜賛

漁夫の舟ハ入るとも、卜者の庭ふ近ぶるもあるれ、蓬莱山の重荷を不負九層塔の輕業を為ざれば心身ともふやまし、三百六十甲

虫の長壽たまうとは右ハ歩ん

蜻蜓賛

眼ハ珠ハふまとふて歌くれを詠し形ハ釘ハ似く禪家これを唱ふ長鎗ハ汝を斬て名高く竹輿ハ汝をもちひて價貴

竹虎

千里の道も一足よりおこり千とせの齢も一ふしよ根ざせり虎のもとしくいさめる心をそなをふさバあしくぶれとぶもふりぬべし竹のうるハしくあよやうふる行ひをもて世ハ立ハうぶり

あき寿をたもつべし

昇瀧鯉賛

魚の水ハさのひくのわるハ鮮ハ順ふんぶり人の世ハ生るも

又こまハひとしくるべし

いろふしてのろやまとぶんけりあるとものとも又えぬ滝の白糸

孤廻燈籠賛

暑きをうハあハ氷をわるあやぶくあく踊て世ぶ出ハ

丘ハ首まる愁ふ

焼竜ハ移れる影の嵐色ハ切ようらぬ分こ抜ぶ世ぶ抜

河豚箴

一杯の美味ハ百年の齢を換るもふれ

ようや死ハ河のうもそそも弓とり計命を的ハ戦んものハ

黒茶碗銘

茶碗の色ハ桃の林ハ放しりんもものハ似つれバ三千年と号

すゑ〳〵までも

桃の花咲くやふかき春のうちふるもはあり春雨

茶七銘　光甫号空中春

長根づいつ世の祖光甫のつくれる茶壺を空中の文字竹のまぐるふよくうゑひめまべ世君と号てまるるも

芍藥亭座右銘

ゝやびことは中のさとび言ぎ〳〵とびゑの中のみやびごと古歌を採るべ〳〵古歌をとぢるるもあるれ和歌の掟ふ捺るべ〳〵和歌の掟ふあづむるもたるれ

仮名手本忠臣藏評

欲ハ井よりを深くして鮒士の智浅く氣ゑより短くして狗死の恨長〳〵星有項天より隱るれども光あらそれやもく斧か茂川ふ沈めども穢濯ぐ〳〵二夫を重されば一夫をうしあるれく小夜衣衰衣と變り君の讐を不討して舅の仇を討で身代金死金とある人を殺狼心猪の身替ゝあるを子をあとふ癡情鶴の巣籠を羨星ふ所縁の一夜妻母鳥鵲の橋をわたる雪ふ添霜の千尋草若鷹翼る麥るも合衣ふ雖る松枝府積の虫を治良方茶草ふ不載と云ふ切髪再縁の根を斷つ妙藥ハ竹を未知ところ足輕く望重くして雜魚魚ふ交り行醜く貌羨くして黄鳥籠ふ入る藥師人を不救石堂ゝれるものあるべ醫る餅を貪り鯉類を恤む義膳通称ふ為ひて答を夜號る殘〳〵赤心城地ふ應〳〵して功を國字ふ作ふ戯場一の小天地の間大人より小兒まいたるまで

身を困め心を傷ざるいあり。ひとりを伊五や、其中ふ居て木偶を舞ふ。悠然として傍人無ぎ若し。其智ふ及ふ可ふ愚ふ及ひ難し

刀劔論

妖を禳ひ邪を駈り、終身用るゆ有るして人よく服ふ劔ふ德あり、骨を截甲を割り、連日戰て不彎不毀ふ劔の用たり。又文ふ美しふを愛して利鈍ふ不拘ふ劔の用を失ひ截斷の利を慕ひて巧拙ふ不拘ふ劔の德ふ戻るべし。巧ふ拙ふ劔いづれ靈あらん。其あるべきいづれの身を護ふ足ん。古刀ふ數百年の戰國を經て、刃を試る事百度以てすべし。新刀肉を試る事両三度ふ不過ふと日を同じして非可論。鑄劔の業大なる哉千載を經て尚用るに堪ふり。況五六百年の物。意ふ任て佩ふ足ふ。其久遠ふ傳ふる殘ふ今鍛て今の用ふ充るあるべし。古の刀劔用るふ不堪時ふ臻て今の刀劔ふ充て用るふあるべし。新刀を愛る人自佩る事を不爲して、こまを孫ふ傳へ新刀ふ鍛ふ者今の人の爲ふ不造して、これを後代ふ遺んと。志あるべ皇國の劔天地と共ふ絶るあるべんを。今鐵を截の利を售て花を襲の刃を模し、數百年の後ふ生れて、數百年前の良工ふ等しべんと。數百年の後ふ古刀用るふ不堪時ふいべ今の新刀。これふ先立て用るふ堪ぎべん

芍藥亭文集二篇　終

い世話國人孫ふ長樹らしい祝之
この祖父(おやぢ)も根ら
ぬ〳〵このもの社きれも根の
管ぬ管ぬ葉ふいのて甲ぬまてトらも
かゝゝゝ國ふて嘴(へゞ)ど人ふ〳〵てめ
二ぬよ友ふて〳〵こ社文のうこ〳〵しいふ

たゝ乗しよりこゝひを書こゝ万
ゝ寺とゝ事

萩の葉もきしくハ探なる
君ゝ心変れ杯ゝ

文保甲辰秀

十九歳　藤原親文